

佳作

「そんなに忙しかったんだね」

北海道
北海道教育大学附属札幌小学校 四年 門田 有紀乃

トポツポコツポツピョー、真夜中にケータイがなった。学校からのメールの音だ。いつもは絶対に起きないお母さんが珍しく起き上がって「ゆつひゃん。ひよんで〜(ゆつちゃん、読んで)。」と寝ほけまなこで私にケータイを渡した。内容は、なんと学校で水もれが発生して明日は臨時休校というものだった！大変だ！でも、お母さんは「あらあら。」と言ってまたすぐ寝てしまった。いつもそうだ。私のはみがきをしている間にグーグー、私がまだ日記を書いているのにグーグー、私が小さいときは毎晩読み聞かせを何十冊もしてくれていたって言うけど本当かなと思う。最近はその本を読みながら寝てしまっていて、仕方なく私がメガネをはずしてあげて本をかたづける事だつてよくある。そして、毎日私が部屋の電気を消している。ほんとにもう！お母さんったら。

次の日、私が起きたらお母さんはお洗たくをしていた。それと、私の漢検の問題作りとPTAのワープロと朝ごはんの用意。何時に起きたの？私は毎朝なかなか起きられなくてポーツとしてるので時間がなくなつて大急ぎでご飯を食べて全速力でJ.Rの駅まで走る。だからお母さんが朝に何をしているか見ている時間はなかったけど、ずいぶん早起きしてるみたいだ。それからお母さんはまたお洗たくをしてペランダに干して、それをしながら朝ご飯の片付けとか家中のおそうじをし

た。ついでに、私の勉強をみたり、ピアノの練習をサボつてたらにらみに来たり、すぐよく動く。時々「あー座りたい。」と、言うので「座れば？」と言ったら、「まだやることあるから。」とまた動き出す。へんなの。

お昼ごはんを食べて少ししたら今度は洗たく物をペランダから取ってきてたんだり、アイロンをかけたたりして「暑い、暑い。」と言っている。「休めば？」と言ったら、「まだやることあるから。」つてもう一回言つて今度は「夜、何食べたい？」と聞いて晩ご飯の用意を始めた。ついでに時々パソコンもしている。気がついたら洗たく物はみんなしまつてあつていつもの家の中になつていた。「いつもそんなにお洗たくとかおそうじするの？」と聞いたら「そう、有紀乃がいない間にね。」と、言っていた。毎日そんなにいいそがしいなら私より先に寝てしまうのもわかる。毎日家にいるお母さんがこんなにいそがしいとは私は何も知らなかった。そんなことはなんにも考えたことがなかった。わかつてよかった。お母さんは本が好きだから、寝る前の本を読む時間がお母さんの休み時間なのかもしれない。でも、疲れていたせいで寝てしまうのかもしれない。もう文句を言わないで電気を消してあげよう。メガネもとつてあげよう。おやすみ、お母さん。毎日ありがとう。でも、お母さんの「やること」はいつ終わるんだろう。